

経済学博士速水 融氏の『近世濃尾地方の人口・経済・社会』  
に対する授賞審査要旨

本書は日本における歴史人口学の草分けである速水 融氏の二〇年にわたる濃尾地方を中心とした研究を集大成したものである。まず第一部では、一七世紀末の『村々覚書』と一九世紀初期の『徇行記』（寛政・文政期の樋口好古による調査）とにもとづき、尾張藩領約九〇〇ヶ村の人口の変動を地図にプロットし、その変動の地域的特徴を明らかにした。とくに、人口の増加が同地方の中心部よりも周辺部において、平坦部の開拓水田化等により、より高率であることを明らかにしたのち、耕地面積、面積当たり石高、牛馬数の変化を観察し、人口が増加する一方で牛馬の数が初期の四戸に一頭から末期の二〇戸に一頭まで減少していることから、人間の労働時間が長時間化したという結論を導いている。

第二部では、五〇年以上連続して残存している宗門改帳を資料に、美濃地方の一七ヶ村四七〇組の夫婦に関し、その結婚、出産、および人口移動を家族復元法により考察、富裕層では高い出産率、結婚年齢の低さが認められるが、信州諏訪地方と異なり美濃地方では「出稼ぎ」を中心に都心部への人口移動が盛んであり、そのため全体としては結婚年齢が比較的高く、また結婚五年以内の離婚が多いことを明らかにし、女性の社会的進出が相対的に盛んであったことを指摘している。

第Ⅲ部の中心は、輪中農村の美濃国西条村の九七年間の宗門改帳を用いての研究である。同資料は記載方法が現住地主義であり、また出稼ぎ人についての記述が詳細であるので、著者は家族復元法により、「個人行動追跡調査」を推進している。その結果、結婚年齢が出稼ぎ経験の有無によって左右されることが多いこと、また死亡率は天保年間を除き一貫して出生率を下回った事実を明らかにし、さらに平均余命は出生時の男子で三六・八、女子で三六・七という数値に到達している。また西条村では男子の五〇%、女子の六二%が生涯に一度は村外で働いており（出稼ぎ労働者の出身階層は下層ほど比率が高く、女子の水呑層では七四%が出稼ぎを経験していた）、またその大半が京都・大坂・名古屋など遠距離の大都市で働いていたこと、さらに出稼ぎ農民のうち帰村したのは三割強にすぎないことを明らかにし、農村が都市への労働力供給源であった事実が農民の地理的移動による結婚年齢の上昇と相俟って、この地域の、すなわち都市比率の高い中央日本の農村人口の安定化に導いたと論じている。また、そのうえで著者は、農民の地理的移動という農村人口安定化のメカニズムが存在しなかった西南日本では高い人口圧が明治維新の起動力として作用したのではないかという問題を提起している。

速水氏は一九七三年の著書『近世農村の歴史人口学的研究―信州諏訪地方の宗門改帳分析』において英仏学界で開発された家族復元法を初めて日本に導入し、日本の歴史人口学の水準を国際レベルにまで高めたのみでなく、近世史の数量経済史的研究の発展に指導的役割を果たしてきた。本書はそうした新しい研究手法をより広い地域とより広範な問題に適用して研究を重ねてきた成果の集大成である。

いずれにせよ、宗門改帳に登場する個々の男女を、その出現から消滅まで追跡し、統計学の分析手法を駆使しなが

ら人口動態を解明するというのは日本の歴史研究では最初の試みであり、またその意味で本書は歴史を徹底的にミクロの単位から観察するという新しい研究方法を開拓した画期的な労作と評価することができる。